

身体文化とメディアの融合と創造：グローバル化するスポーツ文化

著者名(日)	溝口 紀子, パルス トーマス, 和田 和美, マーク シーハン D.
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	10
ページ	75-88
発行年	2010-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000066/

身体文化とメディアの融合と創造 グローバル化するスポーツ文化

溝口紀子、トーマス パルス
和田和美、マーク D. シーハン

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

身体文化とメディアの融合と創造 グローバル化するスポーツ文化

The Fusion and Creation of Physical Culture and Media -Global-ization of sports culture-

溝口 紀子

文化政策学部国際文化学科

Noriko MIZOGUCHI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

トーマス パルス

文化政策学部国際文化学科

Thomas PALS

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

和田 和美

デザイン学部メディア造形学科

Kazumi WADA

Department of Art and Science, Faculty of Design

マーク D. シーハン

文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では平成21年度静岡文化芸術大学学長特別研究「身体文化とメディアの融合と創造—グローバル化するスポーツ文化—」の成果として静岡文化芸術大学開学10周年記念「メディア・スポーツシンポジウム」さらに研究成果を一般市民や関係者に発表する目的として「SUAC文化芸術セミナー」について報告する。特に「メディア・スポーツシンポジウム」では、日仏のメディア・スポーツ関係者と意見交換をすることで、日仏のメディアアイデンティティの相違点や共通点が明らかになった。また今後のわが国のメディア・スポーツのあり方やスポーツ・ジャーナリズムに新しい知見を得ることができた。

This paper reports on the 2009 Sports Media Symposium at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC), and the Seminar of Cultures and Art which also took place at SUAC in 2009. This is a report on a special research grant received from the President of Shizuoka University of Art and Culture. These events allowed the researchers to clarify differences and learn of common features between the media identity of Japan and France through an exchange of opinions with Japanese and French journalists and others related to the field. The new findings from this project have been informative in illustrating ideal practices for sports media and sports journalists in Japan.

1. はじめに

平成21年度静岡文化芸術大学学長特別研究「身体文化とメディアの融合と創造 グローバル化するスポーツ文化」の成果として、平成21年度8月1日(土)静岡文化芸術大学開学10周年記念「メディア・スポーツシンポジウム」を開催し、さらに研究成果を一般市民や関係者に発表する目的としてSUAC文化芸術セミナーを平成21年9月20日、27日、10月4日に開催した。メディア・スポーツシンポジウムでは、日仏のスポーツジャーナリストを招き、「グローバル化するメディア・スポーツ」をテーマに、日仏のスポーツメディアの特徴やメディア・スポーツの将来について議論を交わした。これまで、フランスのメディア・スポーツに関する研究については、まったく行われておらず、本研究により新しい知見が得られると考えられる。加えて来年度の本学新カリキュラムから学科専門科目、多文化共生系の中で「スポーツ文化論」が開講されることに関連し、さらに教育基本法の改定により平成24年度より中学校

での武道必修化が始まることを受け、「グローバル化するスポーツ文化 武道を考える」をテーマに取り上げることで地域にスポーツ文化の理解を促していくことを目的として開催した。

本稿では、メディア・スポーツシンポジウム、およびSUAC公開セミナー「グローバル化するスポーツ文化 武道を考える」について報告する。

2. メディア・スポーツ研究の定義と課題

わが国におけるメディア・スポーツの研究では、橋本[橋本:2000]は、明治から昭和戦前期までのスポーツとメディアの関係について、既に戦前より、メディアによるスポーツの商業主義的利用、国家によるスポーツの手段的利用などの問題が存在しており、メディアがスポーツの接取、定義、大衆化、高度化、また、日本人の身体スポーツ観に及ぼした影響は大きく、今後、スポーツとメディアの関係史に関する研究が様々な側面から進展し、スポーツとメディアの関係独自の時期区分が

構築されるであろうと報告している。また橋本[橋本:2004]は、メディア・スポーツを構造主義的に理解する研究手法について、「メディア・スポーツは、そのもとになっている文化の内部構造に規定され、与えられたテキストがそれなりの好ましい読み方を提供している」と述べている。さらに、メディア・スポーツ論として、早川は、「マス・メディアによって搬送されるスポーツの国際的呼称」あるいは、「テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、Web」などの多様なメディアからなるものととらえてその意味で「メディア・スポーツ」メディア・ミックスという性格をもつと定義している[早川:2006]。

そこで本稿ではメディア化されたスポーツ、すなわちメディアが主体になっているスポーツとして、メディア・スポーツを定義する。

3. 文化・芸術研究センター 開学 10 周年記念 メディア・スポーツシンポジウム

グローバル化するスポーツ文化 - ジャーナリズム、メディア・スポーツの将来とは -

日 時 2009 年 8 月 1 日 (土)

14 時から 17 時まで

会 場 静岡文化芸術大学

南 176 大講義室及び講堂

参加者 一般市民、スポーツメディア関係者
約 300 人

第 1 部 基調講演時間

14 時から 14 時 40 分まで

題目「フランスにおけるメディア・スポーツ」
溝口紀子 (静岡文化芸術大学国際文化学科准教授)

平成 20 年度文部科学省科学研究費若手研究 B「フランスにおけるメディア・スポーツ文化に関する研究」研究課題番号: 20700507 の中間報告を行った。

休憩時間 14 時 50 分 15 時 10 分に、和田和美講師 (メディア造形学科) を中心に作成した adobe「FLASH」による学生作品の映像を公開した。

第 2 部 パネルディスカッション

15 時から 17 時まで

コーディネーター: 溝口紀子 パネリスト:

カリム・ベニスマイル氏 (L'EQUIPE 格闘技編集長)、フロリアン・カロウアズ氏 (EUROSPORTS サッカーディレクター)、西森大氏 (NHK スポーツディレクター)、田村修一氏 (日仏スポーツジャーナリスト)

フランス語逐次通訳兼パネリスト、河合純一氏 (シドニー、アテネパラリンピック競泳金メダリスト、北京パラリンピック競泳銀メダリスト、静岡県総合教育センター指導主事)

4. 「グローバル化するスポーツ文化 - ジャーナリズム、メディア・スポーツの将来とは -」 パネルディスカッション

4-1 日本とフランスにおけるメディアの特徴

溝口: まず日本メディアからみるフランスメディアの特徴などお話しください。

河合: 日本ではその時のイベントや大会に関する質問というのが一般的ですが、海外メディアでは思いもよらない質問がくるんですね。例えば中国の記者から、「今日は中国では月餅を食べる日ですが、月餅を食べましたか?」と聞かれ、周りの選手と戸惑うことがありました。しかし、場の空気が緩んだりして、親近感を感じ新しい取材方法かとおもいました。

西森: 日本選手は政治的な質問をされると避け、「自分たちは自分たちのサッカーをするだけです」とか、「自分は泳ぐだけです」としか答えてくれない。それに対してフランス選手をはじめ、ヨーロッパの選手は自分の意見をメディアに対して言うことができますね。

田村: 選手自身の個性がはっきりしていて、ジャーナリストがした質問に対して、ジャーナリストにも意見を求めることがある。明確な意見や言葉をもつことを大切にそれを応えられることで対等な関係を築きあげているとおもいます。

溝口: フランスメディアからみる日本メディアの特徴、取材方法や選手の対応の違い等お話しください。

ベインスマイル：まず驚いたのは、仕事の仕方です。日本メディアのひとは常にグループでみんな一緒に仕事をしている。フランスはそれとはまったく逆なわけです。たしかに仕事が終わった後は、みんなで食事にいきますけど仕事の時は、お互いの競争であり、ある意味戦いであり、誰が最初にスクープをとるか、その為のポジション取りそういうのがすごく大事ですね。ひとつ例をあげると、アテネオリンピックの100m決勝のレースが終わった後、私と私の同僚のジャーナリストの二人で金メダルをとった選手のドーピングが終わるのを2時間トイレに隠れて待っていました。ようするに彼のインタビューを一番にするために待っていたのです。こんな風にぎりぎりのところで仕事をするわけですね。つまり誰にも得られない情報を読者に提供する。それはたとえテレビでも得られないような情報を自分たちの読者に提供するためにぎりぎりのところまでやる努力を常にしています。

溝口：フランスのメディアは、スクープに対してのモチベーションがものすごく高いですね。独占スクープをとりたいという思いが本当に強いとおもいます。

西森：逆に日本は横並びに意識が強いんですね。いわゆる「特落ち」、自分のところだけコメントがうまく取れないことがそうですが、そういうことをすごく恐れますね。だから記者クラブに行って、取れなかった人は周りの記者にお願いして教えてもらいます。そうすると新聞とかにでてくるのが一緒になっちゃうんですね。そういうところから独自性をだしていくか、ある程度みんな同じ土壌でやってそこから少しずつ違いを出していく感じがします。

カロウアウズ：4年前のキリンカップのフィンランド戦の中継で日本に来たのですが、その時日本のメディアに対してすこしおかしいと感じたことがありました。試合が終わってまずミックスゾーンというインタビューエリアがあって

そこに行くんですが、私も一番よいポジションを確保しようと思い、試合が終わってすぐ行ったわけです。実際一番よいポジションを取り、私の後ろには日本人ジャーナリストがたくさんいました。そのインタビューは宮本選手に対して行ったのですが、そのとき奇妙だとおもったのは、ヨーロッパ、フランスの場合、選手と対等な関係で敬語は使わず話し、そこから深い話をどんどん展開していくのですが、日本選手は常に畏まっています。お互い本音が言えず、話が深まっていけない妙な感じがしました。

ベインスマイル：西森さん、日本メディアが特落ちを恐れたり、新聞なりテレビなりが同じものを書いたり放送するのに、どうして一般の人は、朝日新聞を選んだり、NHKを選んで観たりするんですか。

西森：この質問は会場にいるみなさんに聞きたいですが、それでも書き手やディレクターの微妙なニュアンスなどはでるとおもうんですね。スポーツの好きな人はそういった微妙な違いを好んで選んでいるのではないかとおもいます。



写真1 メディア・スポーツシンポジウム
8月1日静岡文化芸術大学 講堂

河合：最近テレビを観ないのであまりいえませんが、スポーツは面白いものはみえますね。今日も朝早く世界水泳をみました。また今日インターネットでチェックしたら先に世界水泳の結果が

出ていて、全米オープンや女子ゴルフに負けていると感じました。僕は朝の2時に起きて放送を楽しみにしていたのですが、平日は仕事をしていますので土日くらいはライブで観たいとおもっていたのに。やはりライブで観たかったです。

4-2 障害者スポーツの理解を促すためのメディアの役割

河合：障害者の映像の放映が少ないですね。

西森：そうですね。それは視聴率という問題がすごく影響しているとおもいます。今回北京五輪ですが、オリンピック招致の条件で、パラリンピックを同等に取り扱うことを前提にして開催されたのです。そのことによってパラリンピックにもお金が回ってくるようになったんです。これはすごくよかったのですが、同じくらい問題もあって、オリンピックの1分間の映像を流すのと、パラリンピックの映像の1分間も同じ値段になったのです。人気選手の多くはオリンピックの方ですから、1分間でどちらが視聴率がとれるかとなると……。だからオリンピックもパラリンピックも放映権が同じというのは問題があるとおもいます。まだあまり目に触れていない人たちに見てほしいために値段を安くするとか配慮しないとだめですね。日本のメディアだけが問題だとは思いませんが。

ベニスマイル：南アフリカの陸上400mの義足の選手の話がありましたが、普通のオリンピックの参加が認められなかったことはどう思いますか？

河合：要するに、人間の脚だと、走ると筋肉疲労、筋肉痛がおきますが、義足だとつかれないのではないかと。だから公平な競技にならないのではないかとということですね。

ベニスマイル：例えばそれが水泳の場合だと、水着で筋肉の部分のハンディキャップというか弱い部分を克服して勝てる可能性があるとは思いませんか？

河合：そうですね。今変わってきているのですが、ただこれもFINA(国際水泳連盟)の部分で、「水着の規定の中で改良してはならない」と明記しています。つまり水着を販売された状態からセルフで加工してはならないというルールがあるんです。そうすると片足のない人は、その部分をきることになりますがそれがルール違反ということになります。難しい規制があって、なかなか国際ルールを厳格化するというのも、FINAでやっていることを障害者スポーツでやっことうとすると当然、多少の誤差があるというか、そこの部分を許さないからうまくいかないともいえます。国際レベルでうまくいってないから、国内のレベルでももっとうまくいかないんです。例えば練習場所ひとつとっても、ナショナルトレーニングセンターは文部科学省の管轄だから、厚生労働省の支援をうけているパラリンピックの選手には貸すことはできないと言われるんです。

溝口：オリンピックの選手が使用していない時期もですか？

河合：そうです。オリンピック期間中にも貸せないと言われました。それが残念ですね。

溝口：今後は、メディアを利用してパラリンピックの選手の理解を促す必要性がありますね。

西森：北京パラリンピックの視聴率ですが、日本は世界で第2位なんです。1位は中国。あまり放送していないはずの日本が2位という現状は、日本の人々は興味があるのに日本のテレビ局は映像を流していないということですね。

溝口：日本では長野パラリンピックをきっかけに障害者スポーツに興味関心を持つようになったとおもいます。

4-3 成功する取材の秘訣

溝口：では最後にジャーナリストとして成功する取材の秘訣を聞かせてください。

ベニスマイル：特に秘訣ではありませんが、いつも取材のたびに、祖父や父から受

けうがれた言葉を心がけています。ジャーナリストは口を使う仕事だけでも、口だけでなく五感をすべて使って取材するんだと。

カロウアウズ：私も秘訣があるわけではないですが、インタビューされる人とする人のバランスで成り立っているわけでそのバランスを崩さないことが大事な一方で、いくら事前に下調べしてインタビューに臨んでも予想もつかない驚きがあるときもあり、それ引き出せることができるときもある。そういった「サプライズ」を起こることも想定してバランスをとってインタビューすることを心がけています。例えばサッカーのリベリーにしる、ジダンにしる、誰でも彼らをしているわけでそういう人から新しいもの、今まで誰も知らなかった部分を引き出せれるかが大事だと考えています。

西森：まずやはり取材の下調べを徹底しておこないます。たとえば外国の方の場合、ニュースの映像やその方がどう話をしたらくいついてきてくれるか。ということまで詳細に積み上げたうえで取材に臨んでいます。そのうえでなるべく相手に気持ち良く話してもらるように心がけています。

溝口：みなさんは世界の第一線で世界一流の選手を相手に取材をしています。例えば、カリムさんの写真にあったように、ジダンと一流ホテルの一室でシャンパンを飲みながらインタビューをするというようなことは実は表面的なことで、そこに至るまでたった1時間のインタビューのために、もしくは1年前から準備をして、周囲のプレッシャーを受けながら当日を迎えるのです。華やかな舞台に見える一方で、そこに至るまで入念な取材準備をしていることがよくわかりました。本日は貴重なお話をいただきましてありがとうございます。

5. 文化・芸術研究センター 開学10周年記念、グローバル化するスポーツ文化 特別公開セミナー報告「武道を考える～柔道はJUDOに変わったのか?～」

日 時：2009年9月20日(日)
9月27日(日) 10月4日(日)
14時から16時まで

会 場：静岡文化芸術大学 南280大講義室
参加者：約150人(3回の総動員数)
以下講演内容の要約を報告する。

5-1、第1回 9月20日(日)「術から道へ」
～女性柔道家からみる柔道史～
溝口紀子(静岡文化芸術大学国際文化学科准教授)

嘉納治五郎は、明治15年(1882年)に講道館柔道を創設した。それまであった古流柔術と「講道館柔道」は違い、柔道の合理性や科学性を説いて、旧来の柔術との相違、近代社会への適合性を強調した。嘉納が講道館柔道を創出した背景には、東京大学在学中に主任教授であったフェノロサより西洋哲学を学び、さらに英語が堪能で欧米スポーツや教育思想に造詣が深かったことがあげられる。特にスペンサーの『教育論』(1861)を用いて、「知育 intellectual education、徳育 moral education、体育 physical education」を柔道の基礎に置き、柔道の目的は勝負(武術)だけでなく、体育と修心においても見出した。また当時の西欧社会は、工業化が進むなかで衛生問題が大きな社会問題となり、身体の壮健さが重んじられ、スポーツをすることで健全な身体、精神を育成するという教育イデオロギーが涵養されていた時代でもあった[來田2004、33-41]。このように男性ヘゲモニー思想中心であった時代に、嘉納は女性の身体運動をいち早く取り組み、講道館女子部を設けて女性の柔道の振興を図る一方で、女性には試合を禁じ男性とは異なる昇段規定を設定するなど、初期から二重規範を存在させていた。そのため、欧米諸国が第一回世界選手権大会開催(1980)の気運を広げるまでの1970年代まで日本国内では女性の試合が禁止され日本

女子柔道の競技化が遅れることとなった。ちなみに現在もなお女性の講道館昇段規定は男性とは異なり、二重規範が継続されている。

翻って井上は、「一般的に「柔道」は、嘉納治五郎によって発明されたと思われていたが、「柔道」は「講道館柔道」だけではなく、日本古来、伝承されている柔術や海外の思想の複合的なものであり、「和魂洋才」として生まれた武道と考えられる。また武道は「近代の発明」であると同時に、エリック・ホブズボウムらのいう「伝統の発明」の一形態でもあるといえる。古くから伝統とされているものでも、実は特定の価値や規範を正当化するために比較的近年になってから作られたものが少なくはない」と指摘している。[井上, 2004]。実際、これまでの武道論における「柔道」の歴史は、『大日本柔道史』丸山, 1936]を代表するように、「講道館柔道」の歴史が、柔道正史と位置付けられており、言い換えれば、講道館以外の柔道、柔術流派の歴史を含めた柔道のパラダイムについては論じられてこなかった。しかし最近になって、井上[2004]や藤堂[2007]、ブルッス[2002、2005]らによって、柔術から柔道への変容について再検証されるようになった。特に「柔道」という名称は嘉納が使用する以前に、直信流や起倒流ですでに「柔道」を用いていたことや、戦前、講道館柔道は柔術の一流派と明確に区別されていなかったと報告されている。

写真2は、ブルッスから発表されたもので、大日本武徳会柔術形選定委員の構成員とその名簿である。大日本武徳会(以下、武徳会)は、



写真2 大日本武徳会柔術形選定委員
出典：Brousse, M. (2002), Le Judo, son histoire, ses succès. Minerva

明治28年(1895) 初代総裁に小松宮彰仁親王、会長には渡辺千冬が就任し、軍人、内務官僚のほか、武術の大家を役員に、日本の武術の振興、教育、顕彰を目的とし財団法人として設立された。明治39年(1906)7月、武徳会会長の大浦子爵から嘉納に対して、これから柔道や剣道を学ぼうと志す人に対し、流派を拘泥しないで行える「形」作って欲しいという要望があり、武徳会本部にて嘉納治五郎が委員長となり、柔術10流派・師範20名によって「大日本武徳会柔術形制定委員会」が編成され1週間で「大日本武徳会柔術形」が制定された[工藤, 1975: 118・119]。すなわち講道館柔道は、武徳会の組織を構成する柔術一流派であった。さらに大日本柔道史[丸山, 1936: 196・197]、川石[吉田, 2004: 34・35]、道上[真神, 2003]によると、戦前には、講道館だけでなく武徳会も段位を発行しており、柔道界には2大組織が構成されていたようである。しかし、武徳会は昭和17年(1942)から武道関係組織を統制する政府の外郭団体となり、戦後、昭和21年(1946)GHQ指令により解散し、それ以降、柔道史において武徳会の存在感は影を潜めている。そこで、本講義では、特に戦前までの武徳会や海外の女子柔術、女子柔道を取り上げて、歴史社会学の視点から女子柔道史を再検証した。

小崎甲子(写真3)は、明治41年(1908)美術商「清源堂」主人小崎天大の次女として、名古屋市伊勢町(現・丸の内)に生まれる。金



写真3 1942(昭和18)小崎甲子 岐阜
陸軍病院慰問柔道大会で柔の形を演武
出典：近代柔道1990 2月号

城学院高等女子部を卒業後、昭和2年(1927)19歳の時に武徳会愛知支部に入門し柔道を始める。その後、本格的に柔道を始めるため21歳(昭和4年)の時に、大阪府柔道連盟会長だった戸張滝三郎八段の内弟子となり、柔道に専念する。小崎は、当時の講道館では女性は試合が禁止されていたため、講道館ではなく武徳会に所属し、そして試合で男性に勝つことによって、女性の可能性を実証し、既存の価値観や段位制度を変えていくことになる。そして昭和7年(1932)に武徳会大阪支部にて昇段試合を行い、男性3人を破り武徳会初段に昇段し女性初の有段者(黒帯)となった。また小崎は昭和10年(1935)女性で初めて大阪天王寺に「清源館道場」開設し、1939(昭和14年)女性初の「柔道錬士」となった。そして小崎の昇段によって、講道館女子の昇段経緯や前述した乗富政子の飛び級二段の真相が明白になってくる。つまり小崎が武徳会で昇段したことによって、講道館も女子部に対して、昇段の道を開かざるを得ない状況になったのではないだろうか。実際、小崎が武徳会で昇段した翌年の昭和8年に講道館は、小崎に初段を授与し、昭和9年森川、芥川らには女子初段、乗富にはいきなり二段に昇段させている。当時、講道館女子部では試合が禁止されているため昇段試合の機会がなかったのに対し、小崎は武徳会の昇段試合で男性三人に勝って昇段。そこで、講道館女子部は昇段に出遅れたために、創設期より斯道発展に功績があった女性たちに配慮し、昇段試合ではなく師範の推薦(評価)をもって昇段させたと考えられる。実際に嘉納は、「閲歴・功労その他の事由により、講道館師範が適当と認めたるものは、女子柔道有段者として待遇することあるべし、その待遇を受けくるものを女子柔道有段者待遇と称す」として明文化し、昭和11(1936)2月22日、嘉納の長女綿貫範子、嘉納の五女鷹崎篤子、そして私立桜蔭女学校の校長の宮川久子ら6人に女子柔道有段者待遇として昇段させていた。嘉納治五郎によって女子柔道の試合は禁止されていたと思われていたが、昭和21年(1946)女性参政権を得られる以前の昭和7年(1932)武徳会にて小崎甲子が男性を相手に試合が行われ、昇段してい

たことが明らかになった。また海外において、柔術が「護身術」として普及され女性参政権運動の暴行に対する「護身術」として受け入れられた経緯があきらかになった。近代の女性にとって柔術や柔道は「身体運動」としての活動を促しただけでなく、「護身術」として男性を打ち倒す「術」を身につけることによって、男性ヘゲモニーの社会制度を変えていく勇氣と自信を与えたのではないかと考える。

5-1、第2回 9月27日(日)「柔道と異種格闘技」～武道としての柔道の拡がり～
松原隆一郎(東京大学大学院総合文化研究科教授)

柔道とは何か：嘉納治五郎の視点

・「知育」「徳育」「体育」
・しかし、嘉納には、実戦武術(護身術)として役立つ武道という視点もあった。
Cf.、寝技を延々と続けると、仲間がやってきて踏まれたりするので立ち技を主体とすることが望ましい。「武術」「修心」「競技」の三面と読み替えてはどうか。三面あつての「武道」としての柔道

・「競技」：スポーツとしての柔道。ルールによって合法か違法かが決まり、その中ではいかなる技術も許容される(はず)、体育でもある。勝ち負けはゲーム上のものである。

・「修心」：社会に「役立つ」人材の育成。コミュニケーション・ツールとしての武道

・「武術」：護身に役立つ技術。競技のルールの外(柔道競技にとっては「反則」)も考慮し、それにも対処できる技術としての柔道。異種格闘技戦をも辞さない。

・嘉納の言う柔道は、これら三面が均衡するものではないか。

・「競技」の考え方

・「暴力」とは、不定形であり不確実なもの。それを感知するには、競技による接近が必要。

・競技でルールを設定するとその中で新技術が開発され、技は進化する。

・技の全容を知るには、競技化を通じた進化が必要。競技を欠いた流派は、進化によって暴力の全容に接近することができない。

・しかし一方で、ルールは暴力の一部を切り取ったものでしかないから、競技としての発

展は、かえって暴力を見えなくするところがある。

ex. ボクシングは「パンチ」に限定することでパンチの多彩さを導いた。しかし現実の暴力では、パンチ vs パンチになるのは、(双方がパンチ得意との) 合意があった場合だけ。

蹴りや組み技、寝技に終始してしまう可能性も大いにある。

・様々な言葉：厳密な定義を

・競技における「スタイル」:「日本流」は国際ルールが許容するひとつのスタイルにすぎない。組み方、技等、合法でありながら異なるスタイルは無数にある。

ex. 「ロシア流」: 身体能力の違い、民族格闘技との混交

・「正しい柔道」: 右襟左袖もしくは左襟右袖を持ち、ズボンをつかまないスタイル。講道館関係者は、戦後日本の一時代のスタイルをこう呼んでいるが、フランス等ではスタイルのひとつとしかたえられていない。

cf. 武術的には、この組み方は大変危険である。つまり「正しい柔道」は、武道的ではない。頭突き、パンチをもっとも食いやすい構えである。とくに小柄な人には、護身的には片襟片袖を勧める。

・「一本を取る柔道」: 興業プロとして観客の要望に応えるためにKOを狙うK-1同様、競技での勝敗を超えた要請が持ち込まれる柔道。アマチュア競技としては、ポイント勝利も一本勝利も差はないはず。美意識もしくは興業(オリンピック)上の価値観が介在

cf. 賭の対象であるムエタイでは、安全に勝つために、ポイント差がつくと5ラウンドには流すことが多い。対照的に地上波で放映されるK-1では、主催者がKOするように強く要請している(KOできない選手は次回から使わない)

・「プロ」: 興業の試合に出場する場合と、スポンサーから所得が保障される場合とがあるが、両者は別の概念である。柔道はアマチュアスポーツとされるが、五輪には視聴率や興業収入を目的とする部分が多く、また所得保障(推薦入学・就職)のある競技という意味では、たんなるテレビ放映なしの興業プロよりも双方の意味でよほど「プロ的」である。

・どのようなルールを設定するか:「修心」と

「武術」の観点から望ましいものを選ぶのが嘉納の視点であろう。

cf. 「タックル(朽ち木倒し、双手刈り)はレスリング的だから禁止する」というのは、武術的な意味では退化。「レスリングには勝てない」と公言しているようなもの。

・柔道と異種格闘技

1. 国際ルールは様々なスタイルを許容している。

・各国で様々な組み方が開発されている。

2. 七大戦について:「柔道」を名乗る別ルール

・団体勝ち抜き戦、一本取り・引き込みあり、専守防衛あり、ピストルグリップ、ズボンつかみ可、寝技時間無制限*必然性

3. 「柔道」に名乗らない着衣格闘技

・ブラジリアン柔術、サンボ、チタオバ

4. 異種格闘技戦的な戦い方

・フラビオ・カント(ブラジリアン柔術黒帯) vs 加藤博剛戦

・問題

・日本柔道は、ひとつだけのスタイル(「正しい柔道」)に固執してはならない

「石井慧」を排除してはならない。

・国際ルールの変更は、「危険性」以外では、「修心」「武術」の観点で適正なものとするに止めるべきである

・動機付けの面からも、多様なルールの柔道が共存してよい

・「社交としての武道」という考え方 礼法の必要性

5-3、第3回 10月4日(日)「柔道の国際化～フランスのJUDO文化とはなにか～」

Michel BROUSSE ミシェル・ブルッス(フランス ボルドー大学教授)

逐次通訳 宗 龍二(国際文化学科3年)

松原由樹(国際文化学科3年)

逐次通訳指導 トーマス パルス、

マーク D. シーハン、溝口紀子(国際文化学科教員)

Cette conférence a pour objectif démontrer que le développement du judo dans le monde est étroitement lié à la perception que les Occidentaux ont du Japon, de sa culture et de

la force de ses armées. Alors qu'au Japon, le judo de Kano se différencie immédiatement du jujutsu, en Occident les deux activités sont souvent confondues. Elles ne se séparent qu'avec l'orientation sportive du judo. Grâce au sport, le judo acquiert une dimension internationale et devient accessible à tous, sans distinction de classe sociale, d'âge ou de sexe.

L'exemple du judo français montre que la réussite de l'implantation passe par l'occidentalisation de l'enseignement, c'est-à-dire par l'adaptation du judo à la société qui l'accueille.

L'introduction rappelle les grandes époques qui jalonnent l'histoire du judo. Aujourd'hui 8 à 9 millions de personnes pratiquent le judo dans le monde. Il convient rapidement d'indiquer les caractéristiques des arts martiaux japonais, de la période de Meiji et du changement de société qu'elle implique, puis de l'exportation de l'art japonais du combat dans le monde avant de présenter la transformation du judo en sport olympique et de conclure sur l'exemple du judo français.

Le contexte culturel, social et politique est un facteur important de compréhension de l'évolution du judo dans le monde. En particulier, la découverte de la culture japonaise a eu des répercussions très fortes sur la conception artistique occidentale. A l'issue de la guerre entre le Japon et la Russie, en 1905, le monde entier s'est intéressé aux techniques d'entraînement -le jujutsu- et à l'esprit guerrier -bushido- du soldat japonais. Le jujutsu est ainsi apparu comme l'arme qui a permis la victoire du Japon sur la Russie.

De nombreux experts ont enseigné l'art de combattre dans la police et dans l'armée de nombreux pays. Ils ont ainsi diffusé le jujutsu et le judo. De la même manière, les communautés d'immigrés japonais, aux USA, au Brésil mais aussi dans d'autres pays ont utilisé le judo dans l'éducation des enfants et la préservation des traditions.

Cependant, les actions des experts ne

suffisent pas à expliquer la construction de la mémoire collective. Il est nécessaire d'analyser plus précisément le rôle de la presse, de la littérature, du cinéma, de la bande dessinée, des dessins animés pour mieux comprendre la diffusion de l'image du judo dans le monde. Cette analyse met en évidence les représentations sociales du judo comme une technique de défense qui symbolise la sagesse orientale et rend le titulaire de la ceinture noire invincible.



写真 4 ポルドー大学ブルース教授の講演の様子

Au Japon, Kano a établi une rupture entre le jujutsu et le judo, en Occident, c'est d'une part, la continuité entre jujutsu et judo, et d'autre part la spiritualité orientale, qui ont assuré le succès de la méthode de Kano. Jusqu'au années 1960, le judo était considéré comme une activité réservée à une certaine élite intellectuelle et sociale.

Le judo sportif est apparu en Allemagne dès les années 1920. Si les Jeux de Tokyo avait eu lieu en 1940, le judo aurait été un sport olympique mais il faudra attendre 1964 pour que cette reconnaissance soit acquise. La victoire d'Anton Geesink lors de ce championnat a symbolisé la dimension internationale du judo. En devenant sport, olympique, la méthode de Kano s'est répandue dans le monde et s'est également démocratisée.

En France, la progression du judo est exceptionnelle. Il existe aujourd'hui près de

600.000 licenciés. Cependant, 75 % d'entre eux ont moins de 18 ans. Ceci a une influence très nette sur les contenus qui sont enseignés ainsi que sur la manière dont ils sont transmis. Il en résulte de grandes différences entre le judo des enfants et le judo de l'élite sportive. En créant le judo, Kano a montré son désir d'associer les traditions et la modernité. Il a inscrit sa méthode dans la société de son temps. Le Japon doit jouer un rôle central dans l'évolution du judo et dans son adaptation constante aux changements de la société.

<ブルッス氏の講演内容>

海外における柔術から柔道へ

柔術、柔道そして日本自体のイメージが世界中で定着していった20世紀の始め、西洋の国々で日本人移民の波によって、最終的に柔道の定着になったと考えられます。移民の波は、柔道の実施を増加させ、柔術から嘉納の柔道への移行を決定的なものにさせたとおもいます。特に日本人コミュニティが成長すると、柔道を守るために日系人協会が結成されました。日本人は仏教とキリスト教会に加入し、柔道は宗教の枠を超えて、移民生活の大きな役割となっていました。日系人たちにとって、神社や教会は精神的なものではなく、日本語学校、移民のための英語教室、女性クラブ、バスケットボールや剣道、柔道などのスポーツ活動などたくさんの活動をしていました。なぜなら当時、日系人は、現地で人種差別をうけていたために、日系人は公的な社会イベントに参加しづかったという理由が考えられます。そのため、日系二世自身による社会と、スポーツプログラムを構成し始め、海外の移民の間では、生け花や茶の湯、能、俳句、なぎなた、日本料理、剣道、空手、そして柔道の教室は寺や教会で行われていました。

また、武道は日本社会の集団志向や集団意識に通じているとおもいます。道場は日本人の伝統的な価値観や心構えを表すことができる場であったといえます。相撲や剣道、そして柔道は日本人が日本人らしさを向上させたり表したりする方法であったとも考えます。それと同時に、道場ではそれらの価値観や心

構え、そして品格を学び、身につけられるといったメカニズムを形成していきました。これらのメカニズムは日本人の武道の指導者が、日本で生み出された専門的知識や伝統の根源を直接指導することで完成されていきました。さらにこれら武道の目的は人生や価値観を教えることであるので、多くの日本人コミュニティでは一世が伝統を続け、二世がそれを学ぶことによって、完璧な伝達手段になると考えていたからです。すなわち相撲や剣道、柔道は日本文化の象徴として理解できるでしょう。

嘉納は日本の柔道大使もありました。当時、旅行するのは経済的に厳しいものであったのにもかかわらず、彼はたびたびヨーロッパやアメリカ合衆国に足を運びました。彼は北米の日本人コミュニティで柔道を促進するためにハワイ、サンフランシスコ、シアトル、ニューヨークを訪れました。彼はすべての会議、展示会、インタビュー、そして、道場のオープニングセレモニーになど様々な場所に訪れました。なぜならば彼の柔道の信念や指導方法を普及させるため意図的に訪れたと思われます。彼は市民の関心を植え付けるために柔術の公演を引き受けました。彼はこの方法でアメリカでの柔道を普及させていきました。なぜこのようなことができたのかというと第二次世界大戦以前では柔術と柔道が同じであると捉えられていたからです。嘉納は、逆にそのような状況を有利に捉え、西洋諸国で新しいシステムやネットワークを作るためにレスリングの技術を用いて柔道の理解を深めていくように試みました。柔術から柔道への変容が日本で起こったのは19世紀末であった。またヨーロッパや特にアメリカ合衆国では、嘉納は彼のすべてを注ぎ込んで普及活動をした結果、1930年代には柔道が一般的になりました。

柔道のスポーツ化

スポーツとして柔道は1920年代にドイツで最初に行われました。初の国際サマーキャンプはフランクフルトで開かれ、そこでは1920年代終わりに国際会議が開かれるようになりました。その結果、初のヨーロッパ柔道連盟は1932年8月11日にイギリス、ドイツ、スイスによって設立されました。しか

し、日本人指導者ではないドイツの指導者にとっては、柔道はレスリングの試合モデルとして見られていました。このことはドイツ人が「体重別制」を最初に提案したことからも理解できます。柔道とレスリングの類似性によって、「体重別制」の採択は政治的要素も関係していきます。1945年の終わりに日本が占領された結果、GHQすなわち連合国の最高指揮官は武道の稽古を通した軍国主義や超国家主義思想を排除するため命令しました。後に、日本の文科省は剣道、柔道、空手、そして薙刀のカリキュラムをすべての学校、大学で禁止にしました。大日本武徳会と軍に關係する組織は右翼政権によってイデオロギーの目的のため武道の技術の使用されたと考えられて、解散させられました。1950年3月4日、SCAPの教育課主任である作家ルースは武道スポーツの復活をテーマにしたメモを書き、その中で学校、大学での武道スポーツの指導の復活をもとめて陳情しました。その中には、解散に追い込まれた政府機関によって作られた武徳会のような不当な扱いを防ぐために、体重別制度やさらに身長別や年齢別での柔道の試合の提案も含まれていました。

オリンピック競技種目に柔道が採用されるまでの道は長いものでした。嘉納は彼の人生のすべてを、世界的な柔道の普及のためにささげました。しかし、彼は組織化されたオリンピック種目への柔道の採用に関しては困惑していました。1936年の小泉軍司へ宛てた手紙で嘉納はためらいを弁明しています。

「私はオリンピックの柔道の採用への考え方には現在、消極的です。もしそれが他の国のメンバーの要望であるならば、私は反対しません。しかし、私は主導権をとって推し進めたいと感じません。なぜなら、柔道の本質は単なるスポーツやゲームではないからです。私は柔道を芸術や科学のように生活の一部であり、それは個人的な文化の芸術であると考えています。オリンピックはあまりにナショナリズムの趣向が強いので、ナショナリズムに利用されたり、講道館が設立する前の柔術に逆行する形として競技柔道が発展したりする可能性があるとおもいます。政治、国家、民族、商業主義、またはその他の組織による利

害という外部の影響から切り離し、柔道は芸術や科学と同じように自由であるべきです。そして、柔道で繋がっている全てのものは柔道の根本原理である「世の補益」であるべきです。また柔道は他のスポーツのようなプロスポーツではないのです。個人的な利益のために見世物として参加することは断じて許していません。柔道の指導者たちは、確かに指導報酬は受けていますが、それによって地位や名誉が失われることはないのです。この点では西洋の考え方と全くことなり理解するのは難しいとおもいます。これが成功するか否かは、柔道をオリンピックに参加させたいと考える国の同意や理解次第と考えます。」

20年後、「スポーツと柔道」のディベートが日本とドイツの間で盛んに行われました。初代国際柔道連盟会長イタリアのアルド・トルチ Aldo Torti、西ドイツからのエドルガ・シャエフェ Edgar Schaeferのように、戦後、国際的な柔道の指導者はオリンピック競技の採用に柔道の将来を託しました。アンドレ・J・エルテル Andre J Ertel が1960年にヨーロッパ柔道連盟の会長として選ばれたとき、彼の提案は体重階級制度（68 以下、80 以下、80 以上）を置くことでした。エルテル Ertel は、「ヨーロッパ柔道連盟の幹部たちは体重別制度を採用しなくては、柔道はオリンピックの公式競技として受け入れられないと気づいていました。しかし全日本柔道連盟は体重制を拒みました。オリンピック公式競技への採用について、最終決定は1960年8月22日にローマで下されました。第58回国際オリンピック委員会IOC会議は、多数決32対2で、国際柔道連盟IJFを国際オリンピック連盟として認め、そして柔道は東京オリンピックの競技種目に含まれた。ポール・ボネモリ Paul Bonet Maury とアンドレ・エルテル Andre Ertel が主な立案者でした。また1964年オリンピックの優勝したオランダのアントン・ヘイシンク Dutchman Anton Geesinkの勝利では少なくとも2つの理由で柔道に新しいスタートを与えたとおもいます。第一に、オリンピックスポーツとして柔道は現代スポーツの世界で新しい考え方を与えることになったのです。第二に、日本人以外の選手にもっとも貴重な無差別級

のタイトルが渡ったことで、柔道は国際的な規模であると立証されたのです。

文化的なふれあい

オリンピック種目のスポーツになった後の20世紀後半に、嘉納の方式は採用され、ますます多くの国々で文化的伝承遺産の一つになるまで進化しました。しかし海外では柔術から柔道の変容は、日本の影響をあまり受けずに変化していったのです。つまり他の地域では日本の武道つまり柔術の定着の仕方が異なっていて、このことが現代の日本の武道の特性を示しているともいえます。柔道の国際的な発展に貢献した川石酒之助（カワイシミキノスケ）は「柔道はトウモロコシや米に似ていて、その土地の土壌適合し、その土地の柔道に成長しなければならぬ」とよく言っていました。この言説でわかるように多くの西洋諸国で柔術と柔道が嘉納の意味することとまったく異なるというという見解の違いがわかるのではないのでしょうか。私が考えるに柔術と柔道は絡み合いながら再構築され、大衆の願望と無敵の神話が20世紀のはじめからしっかりと定着されていたと考えています。

しかしながら、武道の競技化は危険もはらんでいます。武道が競技スポーツになるとルールによって戦闘の有効性を減少させる傾向があるからです。柔道の「スポーツ化の過程」は、社会学者ノルベルト・エリヤスがいう「文明化の過程」と読み取ることができます。様々なタイプの文化や社会に柔道の普及から生じた変化は時には修正が考えられ、そして最も目に見えるのが技術の変化でした。相手を殺傷するためにたくさんの柔道の技が考案されましたが、嘉納や彼の弟子たちによって、危険な技は排除され教育的に変更されました。最近では、審判規定は、柔道技術の形成に大きな機能を果たしています。各国固有の伝統的なレスリングスタイルからの技術開発という背景から新しいルールの追加点がみられ、そのルール変更にもとない技術研究をする人もいれば、その道義や方法自体を否定する人もいます。その一方で“古い規範”や目的、柔道の本質に帰ることを求める近代の柔道の関係者もたくさん存在していたり、

たくさんの伝統的儀式によって、スポーツ化を否定する思想的な側面考えを併せ持つ嘉納思想を唱える崇拝的な柔道家が50年代に存在していたりしていました。

結論

柔道の国際化は海外の柔術の伝播から始まりとても複雑な過程でした。東洋と西欧の融合、文化違いは、嘉納治五郎の方法論によって発展したといえます。また柔道は日本文化を伝える重要なものであるとも思います。なぜなら現在199カ国もの国で柔道が普及され、フランスでは60万の登録数があり、登録数の75%が18歳以下の子供たちによって構成されているように、国際的な関心を示すものともいえるでしょう。現在21世紀のはじめですが、海外の国々にとって日本の柔道は魅力的で、世界の柔道、憧れ、羨望であり、日本のスタイルを目標としています。そして、世界的な規模になった柔道界でリーダーシップを取っていくことも日本に期待しているのです。（日本語翻訳責任者 溝口紀子）

6. まとめ

本研究はジャーナリズムのグローバリゼーションをテーマに扱った「メディア・スポーツシンポジウム」さらに日本固有の身体文化である武道をテーマに行った「SUAC公開セミナー」の2つのプロジェクトから、グローバル化するスポーツ文化の現状や問題点を明らかにした。特に最近ではメディア・スポーツといわれるほど、メディアがスポーツに及ぼす影響が大きくなっており、日本固有の身体文化である武道においてもその影響を受けている。今後、スポーツ文化のグローバリゼーションは、ますますメディアによって広がっていく一方で、メディアによって凌駕されないようスポーツ本来の価値や理念を再構築していく必要があると考える。

謝辞

本研究の遂行にあたり、ご支援ご協力くださいました大学事務局、学生の皆様に深く感謝いたします。

注

本研究は平成21年度静岡文化芸術大学学長特別研究費の助成を受けた。

引用参考文献

* 引用文献は現代漢字、仮名使いに改めた。

- Brousse, Michel, 2002, *Le Judo, son histoire, ses succès*, Minerva.
- Brousse, Michel, 2005, *Les racines du judo français. Histoire d'une culture sportive*, Presses Universitaires de Bordeaux.
- Elias, N., Dunning, Eric, 大平章訳, 1995 『スポーツと文明化 興奮の探求』, 法政大学出版局.
- 橋本純一, 2000, 「スポーツ・ジャーナリズムとメディア・イベント」『現代メディア・スポーツ論2(特集スポーツ・メディアへの視線)』創文企画, 52 - 63.
- 橋本純一, 2004, 「スポーツ・メディアを批評する(特集スポーツ・ジャーナリズムへの誘い)」『現代メディア・スポーツ論』創文企画.
- 橋本純一, 1988, 「メディア・スポーツとイデオロギー - 日米プロ野球の記号論的研究 - 」『体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究七 現代スポーツを考える』道和書院
- 橋本一夫, 1997, 「メディア・スポーツの文化史」『体育の科学 vol47.12月号, 942 - 944.
- 橋本政晴, 2002 「メディアスポーツ研究の経緯」, 橋本純一(編)『現代メディア・スポーツ論』世界思想社, 26 - 47
- 広瀬一郎, 1997, 『メディア・スポーツ』, 読売新聞社.
- Hobsbawm, E., Terence Ranger, 1992, 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭 訳
- 平野健一郎, 2000, 『国際文化論』, 東京大学出版会.
- 池波 正太郎, 2009, 「妙音記」, 『剣客群像』, 文藝春秋.
- 池波正太郎, 2002, 『剣客商売』, 新潮社.
- 飯田貴子, 2002, 「メディア・スポーツとフェミニズム」橋本純一(編)『現代メディア・スポーツ論』世界思想社.
- 井上 俊, 2004, 『武道の誕生』, 吉川弘文館.
- 榊原直行, 2001, 『メディア・スポーツの視点』, 学文社.
- 金山 勉, 2003, 「デジタル時代のスポーツオンライン戦略 - ミスポーツ・メディア企業の事例研究」『スポーツ産業学研究, vol.13, no13, 53-64.
- 来田享子, 2004, 「近代スポーツの発展とジェンダー」飯田 貴子・井谷 恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』, 赤石書店.
- 嘉納治五郎伝記編集会, 1964, 『嘉納治五郎』, 講道館.
- 工藤雷介, 1975, 『秘録. 日本柔道』, 東京スポーツ新聞社.
- 眞神 博, 2003, 『ヘーシンクを育てた男』, 文芸春秋社.

- 松原隆一郎, 2002, 『思考する格闘技 実戦性・競技性・精神性と変容する現実』, 廣済堂.
- 松原隆一郎, 2006, 『武道を生きる』, NTT 出版.
- 丸山三造, 1936, 『大日本柔道史』, 講道館.
- 森克己, 2006 「イギリスにおけるスポーツ・メディアへの法的規制とユニバーサル・アクセス権」『日本スポーツ法学会年報 13 巻, 69 - 80.
- 内藤洋子, 1992, 『女三四郎 83 歳宙をとぶ』エフエー出版.
- 中村民雄, 2007, 『今、なぜ武道か - 文化と伝統を問う - 』財団法人日本武道館
- Pherdac .C, Défendez vous Mesdames, Manuel de défense féminine, Paris, Rueff.
- 佐々木武人、藤堂良明、柏崎克彦、村田直樹, 1993, 『現代柔道 国際化時代の柔道を考える』, 大修館書店.
- 志々田文明, 2005, 『武道の教育力 満洲国・建国大学における武道教育』, 日本図書センター.
- Smith .A.D, 1986, *The Ethnic Origin of Nations*, Blackwell, (柴山他訳, 1999. 『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会)
- Svinth.J.R., 2001, *The Evolution of Women's Judo, 1900-1945* in *Journal of Alternative Perspectives*.
- Storey, John: *An Introductory guide to cultural Theory and Popular Culture*, pp181-202, Harvester/Wheatsheaf, 1993.
- 早川武彦, 2006 「グローバル化するスポーツとメディア、ビジネス スポーツ産業論講座」創文企画 261 - 263 .
- 佐伯聡夫, 1997 「メディア・スポーツ論序説: メディア・スポーツの構造と機能 - 問題の所在と分析視点のために - 」『体育の科学 vol47.12月号, 932 - 937.
- 多木浩二, 1995, 『スポーツを考える 身体・資本・ナショナリズム』, ちくま新書.
- Thomas, R, 1996, 『Le sport et les médias』
- 藤堂良明, 2009, 『柔道の歴史と文化』, 不昧堂出版.
- 内田隆三, 2007, 『ベースボールの夢: アメリカ人は何を始めたのか』, 岩波書店.
- 薮耕太郎, 2006, 「武道の海外普及に関する一考察 - 福岡 庄太郎によるアルゼンチンへの柔術普及 - 」『立命館産業社会論集』41-4.
- 山本礼子, 2003, 『米国対日占領政策と武道教育 大日本武徳会の興亡』, 学術叢書.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナルリズムの社会学』, 名古屋大学出版会.
- 山本教人, 2000 「国内外におけるメディア・スポーツ研究の同行と今後の課題」『九州体育・スポーツ学研究第14巻 1 - 10.

